

心身重複障害者の母子間の日常的コミュニケーション： 振る舞いの理解可能性の基盤の探索的検討

An Exploratory Study of Everyday Communication Between Mothers and Children with Multiple Disabilities

山本 敦[†], 牧野 遼作[†]
Ats'shi Yamamoto, Ryosaku Makino

[†]早稲田大学
Waseda University
ayamamoto@aoni.waseda.jp

概要

本発表では、心身重複障害者とその母親との間で比較的スムーズに進行している日常的なコミュニケーションに着目し、障害のために生じる様々な困難にもかかわらずスムーズなコミュニケーションがいかんして達成されているか、振る舞いの意味の理解可能性がいかん構成されているかを、日常的な活動の構成に着目することで探索的に検討する。

キーワード：非典型的相互行為 (atypical interaction), 振る舞いの理解可能性 (intelligibility of behaviors)

1. 問題と目的

コミュニケーション場面における行為の理解可能性については、社会学のエスノメソドロジーやそこから発展してきた相互行為分析において理論的・実証的な検討がなされてきている。障害によるコミュニケーションへの制約が生じている場面に着目した研究も近年多くなされるようになってきており（非典型的相互行為分析[1]）、Goodwin による失語症患者の分析が良く知られている[2]。本研究では、失語症のようにもともとあった能力が損なわれる障害ではなく、先天的にコミュニケーション能力の在り方が典型者とは大きく異なるような障害を対象として、その振る舞いの理解可能性の構成を検討する点で、多くの先行研究と異なる観点をとっている。そのような状況においては、通常分析において前提とされるところの、データの参与者間および分析者との間での理解可能性の基盤の社会的共有それ自体が検討の対象とされる必要がある[3]。

今回分析に用いるデータは、心身重複障害を持つ青年（以下 U）とその母親（以下 M）の日常生活の様子の録画・録音である。具体的には、二人が生活の場を中心としているリビングキッチンにビデオカメラを設置し、昼食の前後の時間帯（約2時間40分）を収録したものを対象としている（図1）。

図1 データ収録状況



U の障害は、重度の知的障害があるほかに、下肢の障害により単独での移動が困難であり、細かい動作にも困難さを抱える。また、弱視の疑いがある。使用できる語彙は数十語あり、一語文を用いるが、構音にも難しさがあり、不明瞭な発声になりがちである。これらの条件は、相互の振る舞いの理解や産出において様々な制約をもたらすと考えられるが、データを見ている限りでは、U と M とのやり取りは不思議な印象を受けるほどにスムーズに展開し、目立ったトラブルが見られない。

U と M とのやり取りには、収録者である R（本稿第二著者）も巻き込まれる形で参与しており、この収録が初対面であった U と R との間でコミュニケーションの困難さを乗り越えて“乾杯あそび”が達成されるようになる過程については以前別稿で検討した[4]。その際には、R（すなわち分析者との間に理解可能性の基盤の社会的共有が前提とできる参与者）の反応に基づいた分析を行ったため、U が R に向けて産出した振る舞いの多くについて、注意獲得の機能以上の相互行為上の機能を見出すことはできなかった。

本稿では、M（やはり分析者との間に理解可能性の基盤の社会的共有が前提とできる参与者）が、U の振る

舞いをどのように理解し、相互行為を構成しているかに着目する。MとUとの間で生じている日常的なコミュニケーションは、Uの振る舞いが相互行為的に機能する主要な場であり、Uの振る舞いがMひいてはU自身にとっていかなる理解可能性を持ちうるかは、Mからどのように扱われるかに決定的に依存すると考えられる。

2. 分析

分析においては、U-M間の振る舞いの連鎖関係の定性的な記述(連鎖分析)を行うとともに、その振る舞いの連鎖がいかなる活動の一部として生じているか(状況的活動システム[5])に着目した。振る舞いの連鎖としての相互行為と、それによって構成・展開されていくところの活動は、相互依存的な関係にある。すなわち、活動は振る舞いの理解の文脈を提供し、かつ振る舞いによって活動自体が構成される。振る舞いは活動の一部であることによって理解可能性の基盤を得るとともに、その産出に制約を受ける。本稿で報告する分析は、U-M間のコミュニケーションにおける活動と振る舞いの連鎖の相互依存的関係の在り方を整理するための準備作業である。

図2に、今回分析対象としたデータにおいてUとMが行っていた活動の流れを示した。特徴として、Uは昼食およびおやつ以外の時間に関してはTV画面でDVDを視聴していること、Mは仕事や家事をこなしながら、Uの求めに応じてDVDの入れ替えや操作を行ったり、Uと一緒にDVDに合わせて歌うなど、Uの世話をし続けていることが分かる。

表1に、U-M間で観察された振る舞いの連鎖を類型化したものを示した。振る舞いの連鎖は大まかに4つに分類可能であった。一つ目は活動を成り立たせるためにUの意図の確認が必須となる際に観察されるやり取りであり、さしあたり「生活実践の共同的構成」と名

付けた。「M 質問→U 応答→M 確認の与え」もしくは「U 要求→M 確認の求め→U 応答→M 確認の与え」という連鎖構造を基本としており、Uのネガティブレスポンス(「やだ」)に対しては追加で確認の連鎖がなされていた。これは、ネガティブレスポンスのニュアンスを確かめるものであるように見える。

二つ目は、いわゆる“あそび”と思われるやり取りである。コールアンドレスポンスの構造をもった身体的接触および音声的な掛け合いであり、「情緒的接触」と名付けた。音声的な掛け合いは、DVDの音声(発話や歌、BGM)の模倣とそれに対する合の手や反復からなる。一部の掛け合いはDVDの再生とは独立になされることがある。

三つ目は、活動の進行についてMがUに語りかけるやり取りであり、必ずしもUの応答が見られず、そのような場合にも応答が追及されない「応答を予定しない語りかけ」である。活動との関係における「生活実践の共同的構成」との違いは、活動中でUが能動的な行為主体とはならない場合に観察される点である。

四つ目は、Uの不明瞭な発話や振る舞いに対する対処である。Mの振る舞いとして3つのパターンが見られ、当該の発話や振る舞いを「生活実践の共同的構成」の可能性のあるものとして扱うものと、「情緒的接触」の可能性のあるものとして扱うもの、意図不明なものとして扱うものが観察された。

また、これらの類型に当てはまらない振る舞いの連鎖も少数見られた。「電車/でちゃ」という語を起点とするやり取りは、進行中の活動と一見無関係に生じるように見え、その相互行為上・活動上の帰結も定かではなかった。これは、Uが電車を好んでいることにより、M・U双方にとって反応が期待される語となっているためと思われる。大きな傾向として、Uの発話「でちゃ」は、Mによって電車に関わる話題提起として雑談の開始のように扱われており、Mの発話「電車」は電車に関わる活動の開始としてUから扱われているよう

図2 母子の活動の流れ

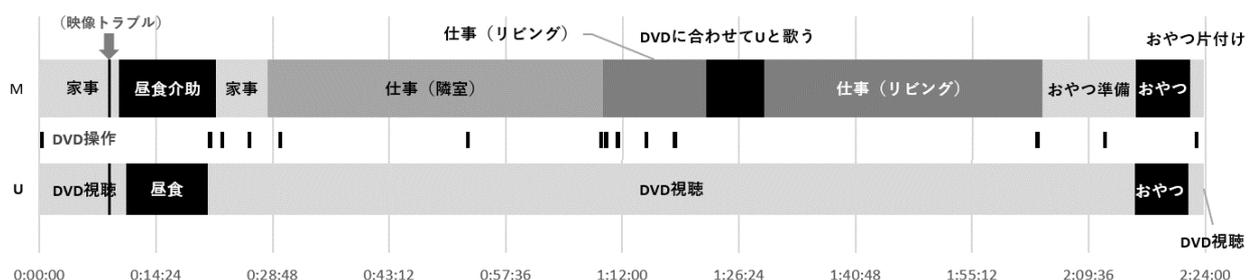


表1 観察されたやり取りの種類

| やり取りの種類 | 内容 | 特徴 |
|------------------|---|--|
| 生活実践の共同的構成 | DVD操作 食事にするかの確認 など | 生活の中でUの意図の確認が必要となるプラクティカルな場面で生じるやり取り。「M質問→U応答→M確認の与え」の行為連鎖を基本構造とし、Uによって開始される場合は「U要求→M確認の求め→U応答→M確認の与え」となる。Mの質問および確認の求めには疑問調が明確に付加される。 活動を指示する語句の使用および、現在進行中の活動の中で意味を持つ物品の指標・操作がやり取りに用いられる。 ・活動を指示する語句：お茶を飲む→「おちゃ」、DVDのチャプターの頭から見る→「もっかい(もう一回)」など ・現在進行中の活動の中で意味を持つ物品の指標・操作：Mのいる方向にDVDのパッケージを置く、DVDのチャプターを変えつつ「これでいいの？」など Uの応答は語彙の使用、「はい」系、「やだ」のいずれかであり、「やだ」の場合やいつも異なる応答が帰ってきた場合に、Mから確認「ほんとにいいの？」や、対案の提示「やだ？じゃあ(対案))は？」がなされる。 |
| 情緒的接触 | 手合わせあそび DVD音声の模倣による掛け合いあそび など | 対象への共同注意と遂行のための相互調整を要するコールアンドレスポンスを基本構造としたやり取り。UがDVDを視聴しているときに多く見られる。それ自体に実践的な機能があるようには見えないが、その達成においてU・M双方のポジティブな情動表出が見られる。 ・手合わせあそび：Uが発声とともに手を差し伸べることで開始され、UとMが手を触れ合わせることで完了する。Mが手を出してきたのに合わせて一旦手をひっこめる、手を触れ合わせるタイミングを遅らせる等のバリエーションをつけられることもあり、その際にはひととき大きな情動表出が見られる([6]を参照)。 ・DVD音声の模倣による掛け合いあそび：DVDの音声・BGM等をUかMが模倣し、他方がそれを反復する／合いの手を入れる。やり取りはレパトリー化され共有されているようであり、BGMが開始されるところでUが要求の発声を行い、Mが歌い始めるといったやり取りも見られる。また、細部がどのようになされるかについては、その都度のバリエーションがみられる。DVDの再生とは独立してコールアンドレスポンス形式のやり取り遊びとなっているものもある。 |
| 応答を予定しない語りかけ | 宣言的な語りかけ 独り言的な語りかけ Uの振る舞いへのコメント | Uが能動的な行為主体にならない生活実践の進行について、Mが宣言的にUに語りかける。Uの応答がない場合にも反応の追及はおこなない。 例1：「この一口でご飯終わりです」：昼食の終了直前 例2：「おかあさんパソコン触ってきていいですか」：隣室で仕事を始める直前 次週の予定等、Uに関わりがあるが理解が困難と思われる事柄について、半ば独り言のような口調で語りかける。言語表現上は質問や確認の求めの形式をとることもあるが、Uの応答の不在に対する反応の追求はおこなない。また、語尾の疑問調は明確には付加されない。 Uの際立った振る舞いに対してコメントを述べる。Uが何らかの反応をした場合に、演技的な謝罪が見られる。 例：M「今日は昼寝してないだね、珍しいね」→U「えん」→M「これはどうも失礼いたしました(畏まったような口調で)」 |
| Uの不明瞭な発話・振る舞いの扱い | なに？ and/or 聞き取り／理解の候補の提示 反復 なんなのよ？((笑)) | 「生活実践の共同的構成」の可能性のある発話・振る舞いとして扱う。Uの反応に応じて上述のいずれかのやり取りに展開するか、反応がない場合には「いいの？」等、要求がないことの確認を経てやり取りが終結する。 「情緒的接触」の可能性のある発話・振る舞いとして扱う。コールアンドレスポンスの形式をとる、やり取りが終結する。 ”わからないもの”として発話・振る舞いが扱われている。Rに対してなされた、U-M間のやり取りの種類に取まらない変則的な振る舞いに対して多く観察された。 |
| 不明 | 「電車／でちゃ」 (Rに対する発話・振る舞い) | Uが電車を好むためか、「電車」やそれに類似した単語に対してM・Uともに敏感に反応する。このため、Uの使用についてははっきりした文脈依存性が見出せない。 U-M間でのやり取りで用いられる発話や振る舞いが用いられてはいるが、使用文脈が全く異なるため、注意獲得の試みである可能性を除いてどのような使用かが現状ははっきりしていない。Mにとっても理解が困難と思われる(「なんなのよ？((笑))」の欄および[4]を参照)。 |

に見える。

3. 考察

U-M間のコミュニケーションにおける活動と振る舞いの連鎖の相互依存的関係という観点から見て興味深い点として、Uの振る舞いに対するMの理解は、意図

の不明瞭なもの扱いまで含めて彼らの生活実践に結びついた形で構成されていると思われること、また、振る舞いの連鎖が活動の要求に適合したかたちで構成されていることがあげられるだろう。

また、情緒的接触の一部について、別の目的に転用されている可能性がある。一部の掛け合いがDVDの再生

とは独立してあそびとしてなされることがあることは先述したとおりだが、その中にU「でんっ」→M「でんっ」という掛け合いがある。これはUが好んで見ているドリフターズの『8時だよ！全員集合！』のあるBGMの終わり部分のメロディーの模倣から発生したもののだが、当該のBGMが流れたとき以外にも、様々なタイミングでUから開始される連鎖となっている。特に、次の活動への移行のタイミングにおいて、U「でんっ」→M「でんっ」→活動の移行、という連鎖構造がしばしば観察される。このような使用は、情緒的接触のためのやり取りから、共同的な活動の構造化へとその機能が移行している可能性を示唆するだろう。

このような生活実践と相互行為の形式・レパートリー間の相互的な影響関係とその発展と変化について考えることは、理解可能性の基盤の社会的共有を分析の前提としてではなく、検討の対象として扱う上で重要な意味を持つと思われる。

文献

- [1] Antaki, C., Wilkinson, R. (2012). Conversation analysis and the study of atypical populations, *The handbook of conversation analysis*, pp. 533-550,
- [2] Goodwin, C. (2007). Interactive footing. In Elizabeth Holt, Rebecca Clift (Eds.), *Reporting Talk: Reported Speech in Interaction*, Cambridge University Press, Cambridge, pp. 16-46.
- [3] 山本敦・牧野遼作 (2023). “コミュニケーション障害”は相互行為の分析によって理解できるか？—非典型者をとらえる視点の整理. *人工知能学会研究会資料言語・音声理解と対話処理研究会 SIG-SLUD-100-17*, 90-94.
- [4] 山本敦・牧野遼作 (2022). わからない相手との相互行為はいかに分析できるか：身体知的重複障害者との“遊び”場面の相互行為分析, *新学術領域研究「顔・身体学の構築」第9回領域会議*.
- [5] Goodwin, C. (2017). *Co-operative action*, Cambridge University Press.
- [6] 牧野遼作 (2021). 相互行為は楽し—遊戯としての相互行為分析の可能性. 木村大治・花村俊吉(編). *出会いと別れ—ヒトと動物の「あいさつ」をめぐる相互行為論*, ナカニシヤ出版, pp. 79-105.